“A Psychology which Accords so Extensive and so Handsome a Place to Sensibility” (4) : A Study of the Bergsonian Notion of <Sensibility> in his Later Years

Ryu MURAKAMI

In another paper I pointed out that Henri Bergson (1859-1941), a French philosopher, in his early years argues on <sensibility> from a similar viewpoint to his contemporaries’. In this paper I aim to examine his notion of <sensibility> in his later years, focusing on *The Two Sources of Morality and Religion* (1932).

Although rarely pointed out, in *The Two Sources* Bergson argues on <sensibility> from his particular point of view. He proposes “a psychology which accords so extensive and so handsome a place to sensibility,” where emotion gains an advantage over intellect and volition.

When we compare *The Two Sources* with *Technical and Critical Vocabulary of the Philosophy*, a French encyclopedia published in 1926, we see that Bergson has his conception in common with his contemporaries to some extent, but that on the other hand he is outstanding among his contemporaries especially for his paying attention to the <superior component> of <sensibility>, which is characterized by activity and unity, in contrast to the <inferior component>, which is characterized by passivity and multiplicity.

「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」（4）

―― 晩期ベルクソン哲学における「感性」概念 ――

村　上　　龍

第６節　「空間」概念との関係にてらした「持続」概念の変化

我々は、ベルクソンが二〇世紀初頭に、一と多の対概念にそくして、「感性」をめぐる晩年の思想に結びつくような仕方で、「直観」概念を確立したことをみたが[1]、このことは、彼が「直観」と密接な関係下にある「持続」概念を、多性への展開の可能性をはらんだ一性として規定したことと、より正確には、世紀の変わり目をまたいでそのように規定しなおしたことと、高度に相関的である。以下では、その点を明らかにするべく、二〇世紀初頭までのベルクソンの主要な論考をとりあげ、「持続」概念にかかわる記述を、とくに「空間」概念との関係に注目して、年代順に検討する[2]。

１．「持続」と「空間」との峻別

哲学上の「克服しえない困難」の多くは、「拡がりのないもの」と「拡がり」とのあいだの、また、「質」と「量」とのあいだの、不当な「混同」に由来すると考えるベルクソンは（D.I. VII : 3）、処女作『意識に直接与えられたものについての試論』（1889年）において、内なるものと外なるものとの混同を徹底

[1] 本稿は、拙稿「「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」（３）――晩期ベルクソン哲学における「感性」概念――」（『山口大学哲学研究』、28巻、2021年、35-51頁）の続編である。

[2] 本節の議論の一部には、拙稿「ベルクソンによるプロティノス哲学の受容――一なるものと多なるものの関係をめぐって――」（『美学芸術学研究』、26号、2008年、56-77頁）、拙稿「ベルクソン哲学における「持続」概念の変化――カント哲学の批判的受容という動機にてらして――」（『美学芸術学研究』、28号、2010年、21-42頁）、ならびに、拙稿「「感性（sensibilité）」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯――一なるものと多なるものとの関係を軸に――」（『美学』、63巻1号、2012年、25-36頁）においても、ごく概略的ながらふれてある。

して退けようとする。したがって、そこでは当然のことながら、「持続」概念と「空間」概念とは、相互の連絡を欠くものとされる。

１－１．「空間」と偽の時間

外的な経験について、空間を「感性のア･プリオリな形式」（D.I. 70 : 64）とするカントに同意しながら（D.I. 68-70 : 62-64, 177 : 154）、ベルクソンは「空間」を、「たがいに判明な（distincts）諸項が配列されうるような［…］等質の環境」（D.I. 170 : 147）として規定する。

しかしながら、内的な経験の形式である時間にかんしては、彼はカントに同意せず、時間を、そこにおいて順次、様々な「意識の諸状態が展開されるようにみえる」、「空間と同様に等質な」「環境」とする考えかたに異をとなえる（D.I.73 : 66）。というのも、ベルクソンの考えでは、「まず諸項を区別し（distinguer）、次いで、それらの占める場所を比較することなしには」、すなわち、「それらを並置すること」なしには、「継起の順序」や「この順序の可逆性」を語ることはできず、したがって、意識の諸状態が順をおって継起する環境として時間をとらえる者は、じつは時間を、たがいに判明な諸項が配列される環境としての「空間に投影」してしまっているのに他ならないからである（D.I. 76 : 68）。それは、言うなれば偽の時間でしかないというわけである。

１－２．「持続」

それでは、時間の本性を、ベルクソン自身はどのように考えるのか。

１－２－１．渾然たる相互浸透による一性

ベルクソンは、「じつは空間に他ならない」「等質の環境」（D.I. 122 : 108）としてではない、時間の真のありさまを「持続」と名づけ、これについて以下のように述べる。

> まったく純粋な持続とは、それ［自我］が現在の状態と先行する諸状態とのあいだに境界を設けることを控えたときに［…］我々の意識の諸状態がとる形式である。［…］そのためには、自我はこれらの［先行する］諸状

態を思いだすさいに、ある点を別の点とそうするかのようにそれらを現在の状態と並置するのでなく、現在の状態とともに組織化しさえすればよい。ちょうど、ある旋律を構成する諸々の音を、いわば溶けて一つになったものとして想起する場合のように。たとえこれらの音が相継起するとしても、我々はやはり、それらを相互に含みあうものとして覚知すると言えないだろうか（D.I. 74-75 : 67）［。］

「持続」という内的な経験の「形式」にあっては、諸要素は「境界」を隔てて「並置」されることなく、「相互に含みあ」って「一つに」「溶け」こむのだとベルクソンは言う。判明なる多性によって規定される「空間」、ならびに、「空間」と化した偽の時間とは対照的に、「持続」は一性に与るものであり、しかもそのさい、ベルクソンはこの一性を、諸要素の「相互浸透」（D.I. 75 : 68）によって、それも、「空間」との対比を念頭に置くならば、伝統的な対概念にそくして、渾然たる（confuse）という形容詞を付すこともできよう相互浸透によって、特徴づけるのである。

１－２－２．生きものの比喩

なお、ベルクソンの考えでは、「持続」における一性は、生命体の有する統一にも喩えられるものである。先の引用文にひき続いて、彼は次のように述べている。

そしてまた、それら音の総体は生きものに、すなわち、その諸々の部位が［…］それらの連携の効果そのものによって浸透しあう、そのような生きものに比すべきであると［…］言えないだろうか。それが証拠に、旋律のうちの一音を過度に長びかせることによって拍子を乱すようなことがあっても、我々に過ちをつげ知らせるのは、そのゆきすぎた長さ、長さとしての長さではなく、それによって楽節の総体にもたらされる質的な変化であることだろう（D.I. 75 : 67-68）。

先の引用文中で[3]、「持続」を論じるうえで引きあいにだされた旋律の有する一性が、ここではさらに、「生きもの」のうちに認められるそれに準えられて

[3] 本節１－２－１．を参照されたい。

いる。「持続」において渾然と相互浸透する諸要素は、「生きもの」の各部位がそうであるのと同様に、たがいに「連携」しあうのである[4]。

１－３．外界における「持続」の不在

そして、ベルクソンにしたがうかぎり、内的な経験の形式である一なる「持続」と、外的な経験の形式である多なる「空間」とは、相互にまったく連絡を欠くものである。

内界に「空間」を持ちきたすことをベルクソンがつよく戒めるのは、すでにみたとおりだが[5]、彼は他方で、外界に「持続」を認めることもいっさい控える。このことは、たとえば、次の文章をみれば明らかである。

> 我々の外部には、持続のうちの何が存在するだろうか。現在だけ、あるいはこう言ったほうがよければ、同時性だけである。おそらく外的な事物は変化するが、その諸瞬間はただ、これを思いだす意識にとって相継起するばかりである。［…］持続を空間のうちに置くこと、それは、まぎれもない矛盾をおかして、継起を同時性のただなかに置くことである。したがって、諸々の外的な事物が持続するなどと言ってはならず、むしろ、それらは表現しがたい何らかの理由をかかえており、それがゆえに、我々が自らの持続の継起的な諸瞬間にこれを考察するさいには、それらが変化したことを認めざるをえないのだと言うべきであろう（D.I. 170-171 : 148）。

なるほど、「空間」をつうじて我々に与えられる外的な事物もまた、変化するように映る。だが、ベルクソンに言わせれば、それはあくまで「表現しがたい何らかの理由[6]」によるもので、我々はけっして、「持続を空間のうちに置」き、「外的な事物が持続するなどと言ってはなら」ないのである。

以上のように、ベルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論』において、判明なる多性によって規定される「空間」とは対照的に、生命体にも準えつつ、「持続」のうちに渾然たる相互浸透による統一を認めたうえで、

---

[4] 以下にあげる個所においても、ベルクソンは生命体の比喩にうったえている。Cf. D.I. 101 : 89-90, 104 : 92, 174 : 151.

[5] 本節１－１．を参照されたい。

[6] 別の個所では、「理解しがたい理由」（D.I. 157 : 137）とも言われている。

この一なる「持続」を多なる「空間」からきびしく峻別する。

２．媒概念としての「緊張」と「延長」

ところが、ベルクソンは第二主著『物質と記憶』（1896年）において、「拡がりのないものと拡がりとのあいだの、および、質と量とのあいだの、和解」（M.M. 202 : 318）を模索しはじめ、そのなかではやくも、「持続」概念を、かつて厳然と切りわけたはずの「空間」概念へと橋渡しする観点が示唆される。

２－１．『物質と記憶』

第一に、ベルクソンは質と量とを、「緊張（*tension*）」（M.M. 203 : 319）という概念をつうじて和解させようとする。我々は、数多くの現象がひとまとめに「凝縮」される「特定のリズムをもった持続」を生きており、たとえば、短い時間のうちに無数の「継起的な振動」を繰りかえす赤色の光について、我々は単一の質をしか覚知しない。だが、かりにそのリズムを緩めて諸々の振動に逐一たちあえたとしたら、どうだろうか。そのときには、すべての振動を見とどけるのに莫大な時間を要することになるのと同時に、その時間の延長におうじて、赤色の感覚中の質的な成分はかぎりなく希薄化するのではないか（M.M. 230-231 : 340-341）。このような推論をへて、ベルクソンは、「物質と十分に発達した精神とのあいだに」「持続の緊張」の「無数の度合い」を設定し（M.M. 249 : 355）、いわゆる量的なものを、きわめて緩やかな持続のもとで「実際上無視できる」程度にまで「薄められた」質とみなす（M.M. 203 : 319）。

第二に、拡がりのないものと拡がりとは、「延長（*extension*）」（M.M. 202 : 318）という概念をつうじて和解させられる。ベルクソンのみるところでは、「我々のすべての感覚がなんらかの度合いで拡がっている（extensives）」という発想が、「現代の心理学」にはますます浸透しつつある（M.M. 243-244 : 350-351）。彼はそうした知見に支えを得て、「我々に与えられるもの」が本来、「分割された拡がりと純粋に拡がりのないものとの中間にあるもの」に違いないと考え、それを「延長」と名づけるのである（M.M. 276 : 374）。

このように、『物質と記憶』においてベルクソンは、「緊張」および「延長」の両概念を介して、一方で外界にも「持続」を認め、他方で内界をもいくらか拡がりに与らせる。「精神」の「統一」から「分割可能な物質」へ降りつつ、

同時に、後者から前者へ昇ろうというわけである（M.M. 201 : 317）。ただし、そのようにして両者を歩みよらせるさい、ベルクソンは物質を、等質的な「空間」とはあくまで区別している（M.M. 202 : 318, 208-209 : 323-324, 234-235 : 343-347, 244-248 : 351-354, 276 : 374）。したがって、ここでは、「持続」概念と「空間」概念とあいだの仲介は、その可能性を開かれながらもいまだ果たされていない。

２－２．「形而上学序説」

1903年の論文「形而上学序説」においては、上でみた媒概念の一つである「緊張」概念が、いっそう系統だった仕方で論じられている。ベルクソンは、色彩の「スペクトル」に準えつつ、上限の「生きた永遠」から、「物質性の定義となろう」「純粋な反復」もしくは「純粋な等質」まで、「緊張」の度合いにおうじた諸々の「持続」の系列を語るのである（P.M. 208-211 : 1417-1419）。「緊張」の度合いという論点にかかわるここでの議論は、おおむね『物質と記憶』のそれをひき継ぐものとみてよい。だが、弛緩の極限としての物質性を、「空間」概念にもつうじる純粋な等質性によって定義することで、「持続」を「空間」へと橋渡しする可能性が、ここではいっそう開かれたといえる。

３．「持続」と「空間」とのあいだの架橋

第三主著『創造的進化』（1907年）において、「持続」概念はついに、「空間」概念とのあいだの連絡を得ることになる。

３－１．度合いをつうじた一元化

ベルクソンは、我々の「持続」よりも「緊張」の度合いの高い「超意識」（E.C. 246 : 703, 261 : 716）を想定する一方で[7]、「緊張」を緩めた我々の内的生にお

[7] ここで言われる「超意識」は、論文「形而上学序説」において「生きた永遠」と呼ばれていたものに相当すると考えてよい。また、ベルクソンはすでに『物質と記憶』においても、「我々のそれよりも緊張した意識」に言及している（M.M. 233 : 342）。グイエによれば、『物質と記憶』のこの一節は、生前に公刊された著作中で、ベルクソンがさいしょに神に言及した箇所である。Cf. Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des évangiles*, Vrin, 1999（1962[1re]）, p. 89.

いて諸要素がしだいに相互浸透をやめて離れてゆく、その傾きの延長線上に外的な拡がりを予想して、次のように述べる。

> だが、しばらくのあいだ、物質というのはこれとおなじ運動がより遠くへおし進められたものであると、それゆえ、物理的なものはたんに心理的なものの逆転であると、想定してみよう。すると、精神はいっそう判明な空間の表象を物質から示唆されるや、空間のうちでたいへんに寛ぎ、きわめて自然にそのなかで動きまわるものであることがわかるだろう。精神はこの空間の表象を、自らの身に起こるかもしれない緩み、すなわち、自身の可能な延長についていだく感じそのもののなかで、暗黙のうちに持っていたのである。[…] 他方で、それゆえにまた、精神の眼差しのもとで、物質が自らの物質性をますます強めることも理解されよう。[…] 精神が形成する純粋な空間の表象は、この運動が到達するであろう終端の図式に他ならない（E.C. 203-204 : 666-667）。

ベルクソンはここで、「延長（extension）」とは「脱緊張（ex-tension）」のことに他ならないと言うことによって、内的な「持続」の「緩み」の延長線上に外的な拡がりを予想し、さらには、その「終端」には理想的な極限として「空間」を位置づけている。ようするに、内界と外界との両者にまたがる「延長＝脱緊張」概念を介して、一なる「持続」から多なる「空間」にわたる、あるいは、我々の「持続」よりも上位に位置づけられる「超意識」から「空間」にまで至る、「緊張」の度合いにおうじた一元的な系列を語ることが可能となった。『物質と記憶』で導入された二つの媒概念の一方を他方の反転とみなすことで、さいしょの著作中でさだめられた「持続」と「空間」とのあいだの本性上の差異が、度合いの差異に変換されたわけである。

３－２．統一から多性への分散

上述のように、一なる「持続」と多なる「空間」との二元性を「緊張」の度合いによって一元化したうえで、ベルクソンは、こんどは前者から後者への分散を論じる。

「持続」の「緊張」の度合いにおうじた系列のうちで最上位を占める「超意識」とは、ベルクソン自身も明言するように（E.C. 249 : 706）、神のことに他なら

ない[8]。この神による創造について、ベルクソンは以下のように述べる。

> そこで、高圧の（à une haute tension）蒸気が充満する容器を想像しよう。しかも、その器の内壁のそこかしこにはひびが入っていて、そこから蒸気が噴出するものとしよう。空中にほとばしり出た蒸気は、ほとんどすべて凝結し、ちいさな水滴となって落ちてゆく［。…］だが、噴出する蒸気のわずかな部分は、つかの間のあいだ、凝結せずに持ちこたえる。この部分は、落ちてゆく諸々のちいさな水滴を持ちあげようとする。もっとも、せいぜい落下を遅らせることができるだけではあるが。それと同様に、巨大な生命の貯蔵庫からも、たえず諸々の噴流が、すなわち、落ちてゆくその各々がそれぞれ一つの世界である、そのような噴流が、ほとばしり出ているのにちがいない。この世界の内部における諸々の生物種の進化は、もとの噴流のさいしょの方向のうちで持ちこたえた部分、物質性とは逆の方向に働きつづける衝撃の残存した部分を、表現しているのである（E.C. 248 : 705）。

ここでは、神的な創造が、蒸気の比喩にうったえつつ、論じられている。「高圧の＝緊張度のたかい (à une haute tension)」「生命の貯蔵庫」としての神は諸々の世界を「噴出」させるが、それら世界は「噴出」するや、あたかも空中にほとばしり出た蒸気が諸々の水滴と化して落ちてゆくかのように、「物質性」へと堕落する。ただし、「噴出」した諸々の世界のうちにも、さいしょの「衝撃」のいくばくかはつかの間のあいだ残存するもので、「諸々の生物種の進化」として表現されるこの残存部分は、凝結せずに持ちこたえた一部の蒸気がそうするように、「物質性」への堕落に抗おうとする。ベルクソンはそう言うのである。

ベルクソンはこのように、神による諸々の世界の創造を、「持続」の「緊張」の系列の上限にあたる「超意識」から「物質性」への落下として、ということはつまり、系列の下限にあたる「空間」をめざす落下として、論じる。一なる

---

[8] 神の問題にかんする、『創造的進化』と『道徳と宗教の二源泉』とのあいだの異同には、ここではふれる余裕がない。この点については、以下の三つの拙稿を参照されたい。「創造性の伝播――ベルクソンにおける藝術的コミュニケーションの問題――」、『若手美学研究者フォーラム論文選』、2004年、18-27頁。「創造性の伝播――ベルクソン美学への一視座――」、『美学』、63巻1号、25-36頁。“Transmission of Creativity: An Essay on the Aesthetics of Henri Bergson,” *Aesthetics*, 13, 2009, pp. 45-57.

ものと多なるものとの二元性を度合いによって一元化したあとで、ベルクソンはそこに、統一から多性への分散の構図を適用するのである[9]。してみると、「持続」概念は多性への展開の可能性をはらんだ一性として規定しなおされたわけであり、ここにいたって、「持続」と「空間」とが相互の連絡を得たことになる。

以上みてきたように、ベルクソンのさいしょの著作においてきびしく峻別された、一なる「持続」と多なる「空間」は、しかしながら、一九世紀末から二〇世紀の初頭にかけて、媒概念による仲介をへてしだいに歩みよる。そして、そのことにともない、元来、渾然たる相互浸透による、生命体にも喩えられるべき統一として規定されていた「持続」は、それにくわえて、多性への展開の可能性をはらむものとして、あらためて規定されることになった。

先にみたところにあるように[10]、「持続ノ相ノモトニ」(P.M. 142 : 1365) 見る認識方法として二〇世紀の初頭に提出された「直観」概念をめぐって、ベルクソンが視覚性と触覚性とを交差させつつ、一性の、それも、生命体にも準えられよう、渾然たる相互浸透による一性の受容と、その多性への、しかも、判明なと形容されるべき多性への展開を、語ることの背景には、世紀の変わり目をまたぐ、このような「持続」概念の変化がある。「直観」をつうじて二つとない (unique) ものと合致した哲学者が衝撃を受けとるのは[11]、合致された当の二つとないものそれ自体が、そうした衝撃を含みもっているからなのである[12]。

３－３.「知性」

なお、「持続」概念と「空間」概念とのあいだの関係が上述のように変化したことをうけて、他方では「知性」が、「直観」とは対照的な認識能力を意味する用語として術語化される[13]。このことを確認するべく、以下では、自然科

[9] ベルクソンは、この分散を論じるうえで、この他に花火の比喩にもうったえている。Cf. E.C. 249 : 706.

[10] 本稿第５節を参照されたい。

[11] 既にみたとおり、論文「形而上学序説」、ならびに、論文「哲学的直観」においてベルクソンは、「直観」を採用した哲学者が受けとる衝撃について語っている。本稿第５節を参照されたい。

[12] 直前の引用文のなかでも、ベルクソンは衝撃に言及していた。

[13] すでにふれたとおり、ベルクソンは、とりわけ『創造的進化』以降、「知性」という

学が約定性に基づくものでありながら、それでも成功を約束されていることを述べる、『創造的進化』の一節に目をとおすことにしよう[14]。

物理学をはじめとする「科学的認識」は総じて「数学的な形式」を採用するが、この形式には「人為的なところ」が多分にあり、たとえば、「測定のための諸々の単位」などは端的に「約定によるものである」(E.C. 219 : 680)。だが、それにもかかわらず、諸科学が成功を収めるのはなぜなのか。この点にかんするベルクソンの見解は、次のとおりである。

> その［物理学をはじめとする諸科学の］成功は、次のように説明するより他ないだろう。ようするに、物質性を構成する運動は、我々がこれを終端まで、すなわち、等質的な空間にまで延長したならば、数えたり、測定したり、相互に関数の関係にある諸項をそれぞれの変動において辿ったりすることができるようになる、まさにそのような運動なのである。そして、そのような延長を実行するためには、我々の知性が自分自身を延長しさえすればよい。というのも、知性的であることと物質的であることとは本性をおなじくし、同様の仕方で生じるものであって、知性は自然な仕方で空間ならびに数学へ向かうからである（E.C. 220 : 680-681)。

ベルクソンはここで、物理学をはじめとする諸科学の成功を、「知性」の本性によって根拠づけている。「物質性」が「等質的な空間」への途上にあり、したがってまた、数学的な形式に正確に適合する傾きを有しているのと同様に、「知性」も「自然な仕方で空間ならびに数学へ向かう」ものである。したがって、物質にかんする認識のためには「知性」が自らの本性に忠実でありさえすればよく、だからこそ科学は成功を約束されているのだとベルクソンは言うのである。

用語を特定の意味あいで用いるようになったことを、シュヴァリエにたいして語っている。拙稿「「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(3)」の註8を参照されたい。

[14] なお、この文脈でエドゥアール・ルロワの論文を参照していることからも伺えるとおり、ベルクソンはここで、当時のフランスの哲学界と科学界とを横断して活発に繰りひろげられた、科学の約定性をめぐる論争をふまえている。この論争については、以下が詳しい。杉山直樹「「新哲学論争」について」、『人間社会文化研究』、4号、1997年、67-71頁。

このように、ベルクソンは「知性」を、「空間」にそくした、物質の認識のために最適な能力とみなす。それは第一に、多なる「空間」にそくした認識であることによって、一なる「持続」にそくした「直観」の対極にある[15]。それゆえにこそ、ベルクソンは論文「形而上学序説」において、知性の習慣的な働きの反転によって「直観」が可能になることを述べ[16]、また、論文「知的努力」(1902年）や論文「哲学的直観」(1911年)、および、とりわけ『道徳と宗教の二源泉』(1932年）において、一なるものを受容する役割を「直観」に割りあてる一方で、これを多なるものへ展開する役割を「知性」に担わせるのであろう[17]。そして第二に、「知性」は、すくなくとも物質を対象とするかぎりにおいて、「直観」が「持続」にそくして「現実を絶対的に所有する」のと相補的に[18]、「原理上[19]、絶対的なものにふれる」(P.M. 84 : 1319)。「延長＝脱緊張」概念によって「持続」と「空間」とが仲介されたことをうけて、「知性」は、「直観」とともに「意識の働きの二つの相反する方向を表現し」(E.C. 267 : 721）つつ、これと同様に現実を絶対的に認識する、「直観」とは真に対照的な能力としての位置づけを得たのである。

本節での考察をへて、我々は、ベルクソンが世紀の変わり目をまたいで、自身の哲学における最大の鍵概念であるところの「持続」を、一と多の対概念にそくして、二〇世紀の初頭に術語化された「直観」や「知性」、ひいては晩年の「感性」の規定におおいに影響を及ぼすような仕方で、規定しなおすべく努めたことを明らかにした。

---

[15] ただし、「知性」と「空間」との親近性への着眼それ自体は、すでに処女作『意識に直接与えられたものについての試論』にもみられる。Cf. D.I. 71 : 64, 73 : 66.

[16] 本稿第６節１－１．を参照されたい。ただし、すでに幾度かふれたとおり、ベルクソン自身の語るところによれば――より正確には、シュヴァリエの伝えるベルクソンの発言によれば――ベルクソンは1903年の時点では、「知性」概念を自身に固有の術語として確立してはいない。おそらくはそのゆえに、知性の「習慣的な」働きの反転によって「直観」が可能になると言われているのであろう。

[17] 本稿第３節１－３－１．ならびに２．、および、第５節２－５．を参照されたい。

[18] 論文「形而上学序説」における「直観」概念の規定をみた、本稿第５節１－１．を参照されたい。

[19] ベルクソンがここで、「原理上」という但し書きをあわせて付すのは、直前にみた引用文中でも言われているとおり、物質性を空間性と正確には同一視していないからであろう。

さいごに、（1）から（4）にわたる本稿の論旨を振りかえろう。

我々は第１節から第４節にかけて、『道徳と宗教の二源泉』の検討をつうじ、「感性」をめぐるベルクソンの、言うなれば哲学的キャリアの晩年における思想について、系統だった理解に達した。ベルクソンは、「感性」を情緒性によって規定したうえで、物理的な刺激に由来する「感覚」をその外延から除外しつつ、これを「低次の」と形容されるべき成分と「高次の」と形容されるべき成分とに二分する。「低次の」成分においては、「感性」は、現実的な表象から付随的に情緒上の効果を被る、そのかぎりで受動的な能力とされる。これにたいして、「高次の」成分においては、「感性」は、いまだ実現されることのなかった二つとない可能性を受容するとともに、受けとられた可能性の実現に向けて知性ならびに意志に働きかける、その意味において受動的かつ能動的な能力とされる。そこで言う未展開の可能性とは、未形成であるがゆえに生命体にも比せられよう仕方で渾然と浸透しあう、潜在的な諸々の表象もしくは行為である。したがって、「感性」からの働きかけをうけた知性ならびに意志は、ピラミッドの頂点から下降するごとくに、統一から多性への分散によって事をはこぶものとされる。そのさい、実現すべき可能性の二つとない（unique）独自性はかならずやピラミッドの底面にまで反響するが、それは底面がただ一つ（unique）でしかありえないことを意味しない。なぜならば、「感性」が受けとる可能性は、一とおりの仕方では汲みつくせないほどに豊かだからである。このように、ベルクソンは「感性」を、とくにその「高次の」と形容されるべき成分にかんして、やがて判明な多性へと展開されるであろう、そのような一性の受容によって規定しながら、知情意のトリアーデのうちで「感性」を上位に位置づける。そして、以上の考えかたは、同時代の思想的環境に鑑みた場合、外延にかんする「感覚」の除外、および、一と多の対概念をつうじて語られる「高次の」成分への着眼の二点において、独自性を有する[20]。

つづく第５節ならびに第６節では、我々は、「感性」をめぐるベルクソン独自の思想が形成された経緯を明らかにするべく、彼の哲学上の術語体系の編成、もしくは再編成の過程を跡づけた[21]。

---

[20] だが、ベルクソンは哲学的なキャリアの初期より、そのように独自な考えかたを貫いていたわけではない。この点については、以下の拙稿を参照されたい。「初期ベルクソン哲学における「感性」概念――一九世紀末の「心理学講義」を中心に――」、『山口大学哲学研究』、25巻、2018年、1-22頁。

[21] なお、術後体系のこのような編成ないし再編成は、カント哲学を批判的に受容する意

第５節では、「直観」概念にかかわる記述を検討した。一連の考察をへて明らかとなったのは、ベルクソンが「直観」をめぐって、一と多の対概念をつうじ、「感性」をめぐる晩年のそれと同型の議論を展開していること、そしてまた、「感性」をめぐるベルクソンの晩年の思想が、「直観」概念を確立する過程でまさに育まれたことである。というのも、彼は、二〇世紀初頭に確立されたこの概念を、のちに「感性」の「高次の」成分に論及するさいにも用いることになる言葉によって、二つとない（unique）ものとの「合致」として規定したうえで、その意味するところを、受動性と能動性との混交、統一から多性への分散、分散にさいしての二つとない（unique）独自性の反響ならびに多性の複数可能性、知性との連携などを論じながら掘りさげているからであり、さらには、「感性」の「高次の」と形容されるべき成分が発現する場面としてのちにふたたび言及することになる事柄によって、この概念の可能性を担保しているからである。

ベルクソンがこのように、「感性」をめぐる晩年の思想に結びつくような仕方で、二〇世紀の初頭に「直観」概念を確立したことは、彼が世紀の変わり目をまたいで、「持続」概念を規定しなおすべく努めたことと高度に相関的である。第６節ではこの点を明らかにした。当初はきびしく峻別した一なる「持続」と多なる「空間」とを、ベルクソンは媒概念をつうじてしだいに歩みよらせ、さいごには前者から後者への分散の構図を提出する。このことにともなって、元来、渾然たる相互浸透による、生命体にも喩えられるべき統一とされていた「持続」は、それにくわえ、多性へと展開する傾きを有するものとして、あらためて規定されることになった。それだからこそ、「持続ノ相ノモトニ」見る認識方法としての「直観」をめぐって、一性の受容、それも、生命体にも準えられよう渾然たる相互浸透による一性の受容と、これの判明な多性への展開とをベルクソンは語るのであり、そしてまた、多性への展開の局面を論じるのにさしては、「直観」とあわせて、これとは対照的な「空間」にそくした認識能力として規定された「知性」に、その役割を担わせるのである。

図のもとに、プロティノス哲学から学びつつ果たされたように思われる。この点については、既出の拙稿「ベルクソンによるプロティノス哲学の受容」と「ベルクソン哲学における「持続」概念の変化」、および、拙稿「ベルクソンのフィヒテ観――ポスト・カントの哲学のあるべき姿をめぐって――」（『シェリング年報』、15号、2007年、65-74頁）を参照されたい。

凡例

ベルクソンの著作からの引用は*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991（1959[1re]）に拠り、以下の略号とともに、単行本、著作集の順に頁数を（　）内に記す。

D.I. : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F., 2007（1889[1re]）.

M.M. : *Matière et Mémoire*, P.U.F., 2008（1896[1re]）.

E.C. : *L'évolution créatrice*, P.U.F., 2007（1907[1re]）.

P.M. : *La pensée et le mouvant*, P.U.F., 2009（1934[1re]）.